

〈放課後のフェミニズム〉としての 「男女共同参画・ジェンダー Student Book Club」の実践

山口 真紀

はじめに

本学では、共通教育科目内に「男女共同参画推進論」「ジェンダー論」が設置されており、両キャンパスで開講されている。そのため、学生は希望すればどの学部にも所属していてもジェンダー教育を受けることができる。講義後のレスポンスシートのコメントや、オフィスアワーに訪ねてくる学生の語りからは、講義の内容に触れ、これまで自身が過ごしてきた環境や経験のなかにジェンダー・セクシュアリティによる差別や抑圧があったことに事後的に気づき、衝撃を覚えている者が少なくない。そして同時に、自身の経験や違和感として存在していた感情が説明可能になったことの喜びから「誰かともっと話したい」、あるいは獲得した視点によって得た新たな疑問を探求するために「講義以外でも学びたい」という希望が切実に語られることがある。

報告者は、上記のような講義後に聞く学生の声から、ジェンダーやセクシュアリティについてより専門的な知識が得られる機会、そして関心のある学生同士が出会い、ともに話し、ともに学べる場が必要なのではないかと感じてきた。また、当時、ジェンダーやセクシュアリティへの問題関心を中心として活動するサークル等が本学では見られなかった。そこで、2019年に自主ゼミナールとしての「男女共同参画・ジェンダー Student Book Club」を立ち上げ、現在まで活動を続けている。

本報告ではまず、現在までの取り組みについて整理する。そのうえで、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる主題が、学術的課題であると同時に個人のアイデンティティおよび人権をめぐる諸課題と深く関わることから、参加者同士がより安全に学び・語ることのできる場としてのセーフスペースの実践と、フェミニズム活動の試みとして実施した ZINE の発刊について詳述する。

I. Student Book Club の取り組み

I-1. 目的と概要

「男女共同参画・ジェンダー Student Book Club」(以下、ブッククラブ)は、①ジェンダー・セクシュアリティに関する知識の習得、②経験のなかで感じてきたことや問題意識の言語化、そして③フェミニズムを実践するゆるやかなコミュニティの創出を目的とした、ジェンダー論の初学者のためのゼミナールである。

2019年5月より月に1回程度の頻度を目安に、現在までに計26回開催してきた(ただし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中断・不定期開催にならざるを得ない時期も生じている)。主な活動内容は、

本学の男女共同参画担当教員（報告者）と希望する学生が、ともに関連する図書や論考を講読したり映画などを視聴したのちに、ディスカッションを行うものである。他にも、新規参加者のためのガイダンスや、交流を目的とした雑談のみの回、著者を招いた「書評会」、「映画上映会」といった公開イベントを実施してきた（I-3で詳述）。

I-2. 参加者募集と告知

参加者募集は、共通教育科目「ジェンダー論」「男女共同参画推進論」、現代社会学部「ジェンダー論」の授業内および学内ポスター、口コミにて随時行っている（図1）。参加ハードルを下げ、誰でもいつでも気になる回に参加することができるように、Twitter アカウントを設け、実施日や対象図書等の告知、また毎回の実施報告（参加人数や議論内容等）を更新することとしている（2022年5月現在、178 フォロワー）。なお、当該 Twitter アカウントは、本学の「男女共同参画ライブラリー」の案内や、ジェンダー・セクシュアリティに関するニュース（「生理の貧困」に関する記事等）も配信し、情報発信の拠点としても運用している。

Twitter によって活動内容が可視化されていることから、他大学の同様の自主ゼミナールのコミュニティ（近畿大学、京都大学等）ともつながり、互いが主催するイベントや読書会に参加するなどの交流も行っている。



図1. ブッククラブ告知ポスター

I-3. 実施内容

実施日程、時間、場所、対象図書・論考・映画、参加人数の一覧を下記に示す（表1）。

・通常回

2019年5月より2020年1月までは対面実施、2020年5月以降はオンラインで、現在までに計23回実施している。毎回の主題は、その前の回のディスカッション内容や、学生からの提案を参考に、日常のなかで感じてきたジェンダーへの問題意識を言語化できる機会となるように、またそれらが女性史やフェミニズム理論における論点とつながっていることを示すことを意識し、できる限り多岐にわたった主題選定を行ってきた。

主題に関する図書や論考は、入門書の域を超えて、比較的専門性の高いものを教員が意識的に選定している。参加学生にヒアリングすると、一般的な「ジェンダー論」を学修したうえで、「より専門的に学びたい」「フェミニズム理論を使えるようになりたい」というモチベーションで参加していると話すことが多いためである。講読に苦勞する学生もいないわけではないが、ディスカッションのなかで主題が参加者たちの言葉で分かりやすく噛み砕かれてくると、自身の問題意識と接合して活発に話しはじめるケースも見られた。文献の入手については、学生が新たに購入しなくてもよいように、必ず事前にコピー等を配布するようにしている。

映画視聴の回を除き、毎回2時間程度のディスカッションを目安に終了としているが、多くの回

において、ディスカッション後も1時間程度の雑談が続く。そこでは、教員の介入を離れて、日ごろの学校生活や就職活動、ニュースなどにおける参加者のジェンダーやフェミニズムの問題意識が話され、参加者同士で意見交換が行われている。

事前の出欠等とはならない自由参加制をとっていることもあり、参加人数は回によって増減がある。性別の内訳については、女性自認で発言する参加者が半数より多いものの、個別のジェンダー・アイデンティティは問うておらず、正確な数字を出すことはできない。また、参加者には、近畿大学や大手前大学、同志社大学、早稲田大学、お茶の水大学といった本学以外の学生もおり、学年も学部初年次から博士課程院生までと幅広いものであった。

・著者を囲んでの「書評会」

2021年7月の第22回では、『レズビアン・アイデンティティーズ』（2015年、洛北出版）の著者・堀江有里さんを講師に招聘した書評会を行った。参加者から「一冊の本を、時間をかけてしっかり読みたい」という希望があったため、5回にわたって各章を講読し、「書評会」はその最終目標として設定したものであった。セクシュアリティとアイデンティティの関わりを政治的に問うという主題は参加者の問題意識から抽出したものである。初学者には専門性のハードルの高い図書ではあったが、「ひとりで読むのは難しいから」という理由での新規参加者もあったように、「知識習得の訓練や機会の提供」という観点に応えた企画であったと考えている。

書評会の開催の情報は、当該図書を発刊した出版社のTwitterアカウントがツイートしたことによって広く知られ、リツイートや「いいね」の反応など、通常回よりも多くの関心が寄せられた。しかし、書評会は公開イベントとはせず、事前の5回の精読回のいずれかに参加した者のみとするセミクローズ形式で実施することとした。継続的に参加してきた者が新規参加者の前で萎縮してしまったり発言機会を逸してしまう可能性を排し、互いに顔見知りとなった学生たちが著者と緊張せず十分にディスカッションができる場となることを優先したためである。この試みは、IIで後述するセーフスペースのための実践のひとつでもある。参加者はそれぞれ自身の関心とつなげた質問を事前に用意してきており、著者による丁寧な応答があったことで、当初2時間の予定であった書評会は3時間を超えて終了した。

・公開イベント「映画上映会」（2回）

第10回、第26回では、公開イベントとして映画上映会を開催した。2020年2月の第10回では、ブッククラブの枠を超えて本学教職員だけでなく近隣住民にも開き、アメリカ合衆国連邦最高判事であったルース・ベイダー・ギンズバーグをモデルとした映画「ビリーブ——未来への大逆転」（2018年、アメリカ）を上映した。ミニレクチャーののち、小さいグループによるディスカッションを行い、全体でシェアする時間をもった。

翌年度はコロナ禍のために実施できなかったが、2021年11月の第26回では、日本でもベストセラーとなった韓国のフェミニズム小説の映画化「82年生まれ、キムジョン」（2019年、韓国）を上映した。感染対策のため学内者に限定し、ディスカッションは行わず、「女性の経験を書く・読むことの歴史的・現在の意味」に関するミニレクチャーを実施した。会場には、男女共同参画ライブラリーに所蔵されている、近年のフェミニズムをめぐる韓国の出版物を紹介するコーナーを設けた。

表1. 実施日時、場所、対象図書・論考・映画、参加人数

	日時	時間	場所	対象図書・論考・映画	参加人数
1	2019年 5月28日	17:00	KPC1	主題：エンターテインメントとフェミニズム 映画：「マッド・マックス：怒りのデス・ロード」（2015年、アメリカ）	7
2	6月25日	17:00	KPC1	主題：モヤモヤを言葉にする 図書：イ・ミンギョン『私たちに必要なのはことばが必要だ：フェミニストは黙らない』（2018年、タバックス） 論考：江原由美子「からかいの政治学」（1981年、『女性解放という思想』）	9
3	8月11日	14:00	KPC1	主題：家父長制を学ぶ 論考：上野千鶴子「家父長制の物質的基盤」（1991年、『家父長制と資本制』） 映画：「エクスマキナ」（2015年、イギリス）	18
4	8月14日	13:00	大阪 ワーキング スペース	主題：家族の多様化 映画：「ハッシュ！」（2001年、日本）（部分視聴） 映画：「ウーマン・ラブ・ウーマン」（2000年、アメリカ）（部分視聴） 動画：「サザエさん」（部分視聴）	7
5	10月2日	16:00	KPC1	主題：日常の中にあるジェンダーの「発見」 論考：田嶋陽子「自分の足を取り戻す」（1985年、『女を装う』初出）	5
6	11月5日	16:00	KPC1	主題：女性史：ウーマン・リブを学ぶ 論考：上野千鶴子「日本のリブ：その思想と背景」（2009年、『新編 日本のフェミニズム1：リブとフェミニズム』） 論考：くるぶ・開うおんな「便所からの解放」（1970年） 論考：田中美津「わかってもらおうと思うは乞食の心」（1972年、『いのちの女たちへ』）	4
7	12月11日	16:00	KAC	主題：ジェンダーと学校教育 論考：木村涼子「ジェンダーと学校文化」（1990年、『学校文化』） 論考：古久保さくら「女の子が群れるということ：少女たちの社会化」（2003年、『ジェンダーで学ぶ教育』）	7
8	2020年 1月5日	14:00	KPC1	主題：女性思想家の思想と人生を学ぶ 映画：「ハンナ・アーレント」（2012年、ドイツ）	5
10	2月5日	14:00	KPC1	公開イベント：映画上映会 映画：「ピリブ：未来への大逆転」（2018年、アメリカ）	20
11	5月2日	14:00	オンライン	雑談：最近見たもの読んだものの紹介	6
12	12月26日	14:00	オンライン	雑談：再開のための打ち合わせ（読みたい本など）	3
13	2021年 1月15日	13:30	オンライン	主題：最近のSNSでのフェミニズムの動き 図書：『エトセトラ vol.4：女性運動とバックラッシュ』（2020年、エトセトラボックス）	3
15	2月9日	13:30	オンライン	主題：フェミニズム理論の基礎を学ぶ 論考：竹村和子「どこから来て、そしてどこまで来たのか」（2000年、『フェミニズム』）	7
16	3月11日	13:30	オンライン	主題：セクシュアリティとアイデンティティ 図書：堀江有里『レズビアン・アイデンティティーズ』（2015年、洛北出版）、第1章・第2章	10
17	4月2日	13:30	オンライン	図書：同上、3章・4章	5
18	4月30日	16:00	オンライン	新入生等ガイダンス	5
19	5月5日	16:00	オンライン	図書：同上、5章・6章	9
20	6月6日	16:00	オンライン	図書：同上、7章・8章・終章	8
21	7月11日	16:00	オンライン	雑談：「書評会」のための質問準備等	7
22	7月26日	13:00	オンライン	主題：著者を囲んでの書評会 講師：堀江有里さん（『レズビアン・アイデンティティーズ』著者）	10
23	8月29日	16:00	オンライン	主題：政治とジェンダー 論考：三浦まり「クオータの取扱説明書」（2021年、『世界』「特集 さらば、オトコ政治」） 論考：申瑛榮「「政治とお金」のジェンダー格差」（2021年、同上） 論考：伊藤正子・田中まどか・東友美「議会のハラスメントはなぜ止まらないのか」（2021年、同上）	6
24	9月25日	16:00	オンライン	主題：女性史：井上輝子さんの著作を読む 論考：井上輝子「女のアイデンティティを求めて：中間世代の見たウーマン・リブ」（1971年、『婦人問題懇話会会報』） 論考：井上輝子「〈女の視座〉をつくる」（1987年、『講座女性学4 女の目で見ると』）	7
25	11月10日	17:00	オンライン	主題：資本主義とフェミニズム 図書：堅田香緒里『生きるためのフェミニズム：パンとバラと反資本主義』（2021年、タバックス）	5
26	11月29日	13:15	KPC1	公開イベント：映画上映会 映画：「82年生まれ、キムジヨン」（2019年、韓国）	30

*網掛け部は「通常回」以外のイベント

II. セーフスペースのための実践

ブッククラブでは、「セーフスペース (Safer Space)」となるための工夫や取り組みを意識的かつ積極的に行ってきた。セーフスペースとは、もとは社会運動の場から生まれた概念であり、「差別や抑圧、あるいはハラスメントや暴力といった問題を、可能な限り最小化するためのアイデアのひとつで、「より安全な空間」をつくる試み」のことである (堅田 2021: 167)。

ブッククラブの運営においても、この概念は大変重要である。ジェンダーやセクシュアリティといった、個人のアイデンティティや経験と切り離すことが難しく、そして社会的正義や人権と密接に関わっている主題においてはとりわけ、議論がなされる際には細やかな配慮が必要である。こうした問題圏においては往々にして、当人は議論をしているつもりでも (すなわち「意図」しなくとも)、知識や経験不足、自己の特権性への無自覚、また他者への想像力や配慮の足りなさ等が原因で、差別発言やマイクロ・アグレッション、マウント行為、アウトティングなどが起こり得るためである。そしてそうした現象が起こり得るということに注意が払われていない場合、そこは参加者にとって「安全な場」とは言えないだろう。

先述したように、ブッククラブは、ジェンダー・セクシュアリティへの関心に基づいて他者が出会い、互いのエンパワメントへとつながるようなコミュニティの創出を目的としている。上記の可能性を完全に排除することは不可能であっても、少しでも「より安全な」場であるために、教員も含めた参加者それぞれが自分に何ができるのかについて考え、実践するように努めてきた。

II-1. ディスカッションの方法

セーフスペースのための工夫のひとつは、ディスカッションの方法についてである。これは主に教員の特権と役割をどう考え、施行するかに関わっている。ブッククラブは、講義形式の「教員対学生」という縦の関係における一方向的な知識の伝達ではなく、(フェミニズムがそうあるようになってきたように) 教員も含めた参加者同士が互いに学び合う、横の関係の構築を目指した。しかしながら実際には、教員という立場は学生に対してハラスメントに転じる強い影響力を与え得るものであり、この差をないものとするのは不自然であり、権力の隠蔽でもある。ただし同時に、先行している知識・経験を必要に応じて正確に分かりやすく伝えることは、教育者の義務としてもある。ゆえにこのバランスに苦慮しつつ、「権力的な場」とならないための工夫として、知識の提供を行いつつも、議論誘導や特定の意見を価値づける振る舞いを行わないよう努めた。ディスカッションの際には、参加者の数に応じてグループを作り、教員はオブザーバーとして参加することとした。またオンラインでの少人数の議論では「教員対学生」という固定した構図となりやすいため、司会を参加者と交代で行うようにした。上記は未だささやかな工夫に留まるものであるため、今後も自身の課題として引き取って考えたい。

一方で、教員を除く参加者間にも様々な特権性のバリエーションが存在している。なぜなら、参加者の社会的背景や立場は様々であり、それゆえ常に権力勾配が存在しているためである。例えば、日本社会におけるマジョリティ側の属性である者、例えば男性、シスジェンダー、ヘテロセクシュアル、日本国籍者などは、マジョリティに対して優先的な立場を得ている。それは、ディスカッションにおいては端的に、発言数や発言力といったかたちで場に影響力を与え、支配する力に反映され

る。ブッククラブでは、「決して誰もがフラットな地平で集い出会えるわけではない」という事実のうえで、いかに公平にディスカッションができるのかについて考えてきた。全ての参加者が発言機会を持つことを通例化することに加え、発言時間の配分が偏ったり、他者に抑圧的な発言があった場合には、教員あるいは気づいた参加者が意識的に介入した。「教員の介入」は先の指摘と矛盾するようではあるが、「特権を公平性のために使う」という視点も同時に重要であると考えている。

II-2. オンライン化における「場のルール」

2020年2月ごろから全国的に広がった新型コロナ感染拡大の影響のため、第8回である1月5日から開催を見合わせ、2回の雑談回を経て、2021年1月の第13回より継続的にZoomでのオンライン実施を開始した。これに伴って、学外からの新規参加も見られるようになった。ただし既に多く指摘されてきたように、「誰でもオンラインで参加可能」というオープンな集会には、対面時には意識するのことのなかった問題が顕在化する。端的に言えば、匿名性が高く信頼関係が結びにくいことから、セーフスペースとはなり難いのである。共有された個人的発言や経験等がTwitter等のSNSに流出する可能性なども考えられる。もちろん参加者はみなそうしたことに注意深くあろうとする者ばかりであったが、参加者自らでセーフスペースを守るためにも、改めて「場のルール」を言語化することとした。そのうえで、以降の新規参加希望者に対してはMicrosoft Formsを使った事前申し込み制を導入し、ある程度の個人情報の申告をお願いするとともに、「場のルール」への同意確認を行うこととした。

「場のルール」を作成するにあたって苦慮した点は、ブッククラブの全ての参加者は「何者かを問われず」、「尊重される」ことが重要でありつつ、それを可能な場にするためには、他者への発言に対する責任を問えるだけの「顔」が見える必要があるという、一見して相反する指針を両立させることであった。具体的に言えば、参加者のジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティ、あるいは個人的経験や立場の表明を強いることなく、しかしながら信頼関係を結ぶための最低限の自己開示をお願いする必要があった。参加者と相談のうえ、個人情報担当教員のみが管理することとし、その旨を明記して、参加申込の際に下記の項目のみを申告してもらうこととした。

- 名前と読みがな（ブッククラブでは非公開）
- ブッククラブで呼ばれたい名前
- メールアドレス
- 所属（大学・学部・学年等）
- その他、配慮を希望すること

また、「ルールを守っていただけない場合は、主催者の権限で場を中断し、次回からの参加を不許可とさせていただきます」と付記し、下記の「場のルール」への同意を求めた。なお、作成にあたっては、日本女性学会研究会における例会の注意書きや、他大学の学生サークルにおけるコミュニティールールなどを参考にした。

① ビデオオンでの参加

- ② 参加者のジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティ、トラウマ的経験の有無についてのカミングアウトを促さない
- ③ 上記について、本人が話そうとすることを妨げない
- ④ 参加者への誹謗中傷や、声を荒らげるなどの威圧的な話し方、割り込み、頭ごなしの否定、からかい、マウント行為などを行わない
- ⑤ 録音・録画、スクリーンショットを撮らない
- ⑥ 知り得た個人情報を第三者や Twitter 等の SNS に漏らさない
- ⑦ 交換された意見について、個人を特定し得るかたちで第三者に話したり、Twitter 等の SNS に記さない

Ⅲ. ZINE の発刊

2021年1月には、ブッククラブのZINEを発刊した。

近年、例えばプライドパレード等においてもブースが設けられるなど、若い世代のフェミニストやセクシュアル・マイノリティのコミュニティから積極的にZINEが発刊されはじめている。ZINEとは雑誌のMagazineから派生した語と言われており、主として手作りの小冊子の形で発刊される、自主的な情報発信の手段のことである。元来、ZINEはSFやパンクといった領域における「非正当的な」「カウンターカルチャーの」文芸運動として理解されてきた。しかし近年では、そうした認識それ自体が「都市部の若い異性愛者・健常者中心の白人男性文化に偏りすぎている」と批判され、19世紀からのフェミニズム運動内で展開されていた女性たちの活動のなかにZINEのルーツを見出す研究も行われている（野中 2022）。まさにこの視点から研究を進めているアリスン・ピープマイヤーは、「少女と女性によって制作されるジン」、すなわち「ガール・ジン girrrl zines」とは「彼女たちが文化的体験を包含する素材（雑話、メディアの表現、イデオロギー、ステレオタイプ、さらに身体の一部までも）から、自分たちのアイデンティティ、コミュニティ、またそれを説明する言説を構築する場」であると説明し、「20世紀末期においてフェミニズムが展開した場」に他ならないと述べている（Alison 2011: 18）。

フェミニズムにとってZINEの活動が重要であり続けてきたのは、それが性暴力や日常のなかの家父長制、自分自身の身体についてなど、女性たちにとって不可欠な（しかし必ずしも公には関心を向けられることのなかった）主題に言葉を与え、蓄積し、共有する営みであったためであろう。こうしたフェミニズムの歴史的な営みにならって、ブッククラブにおいても、「経験のなかで感じてきたことや問題意識の言語化」のための試みのひとつとしてZINEの作成を行なうこととした。

Ⅲ-1. ZINE の概要

ブッククラブのZINEは、編集長およびデザインを学生が担当することとし、テーマを「変化」とした。「変化」とは、編集長の言葉によれば「ブッククラブに参加して、あるいはジェンダー論やフェミニズムとの出会いによって生成した感情の揺らぎ」「大切にしたい感情」のことである。それらを言語化し共有するという目的のもとではじめてのZINEは編纂された。

投稿の募集指針としては、恒常的に参加しているメンバーに限定せず、Twitter を使って広く公募することとした。具体的には、趣旨や投稿方法、作成イメージを記したポスターを学生が作成し、2020年1月にTwitter上に告知を開始した(図2)。当初は締切を3月16日としていたが、新型コロナが第一波の高まりを見せ始めたことによる混乱もあり、最終的な締切は5月6日となった。

ZINEには、本学学生のほか、他大学学生と社会人あわせて8名からの投稿があり、完成版はA5版・30項・フルカラーの冊子となった。表紙の「鎖の内側から外に溢れて咲こうとする花」のデザインは、製作者の編集長がジェンダー規範を打破するものとしてのフェミニズムに込めた思いから図案化されたものである。また「学術的な“硬い”イメージから脱して、フェミニズムのスタイリッシュさを強調したかった」との意図もあったという(図3)。

投稿者はそれぞれ匿名で、詩や川柳、Twitterのつぶやきに似せたもの(短文に日時が付記されているもの)や、雑文あるいはエッセイ調のある程度まとまった分量がある書き物など、多様な形式で寄稿されている。主題も多岐にわたっており、「ジェンダーギャップ指数」や「ブッククラブで扱った論考や映画から考えたこと」、また「自らの身体をセックスやネイルといった観点から捉え直そうとしたもの」、「推し」のジェンダーへの無理解な振る舞いにどう対応するか」など、社会的な課題に直接アプローチするものから、個人的経験として書かれた問題意識までがランダムに並んでいる。またそれぞれの書き物には、投稿者と編集長がその作品に関連して選定したイメージフォトが背景に付されている。

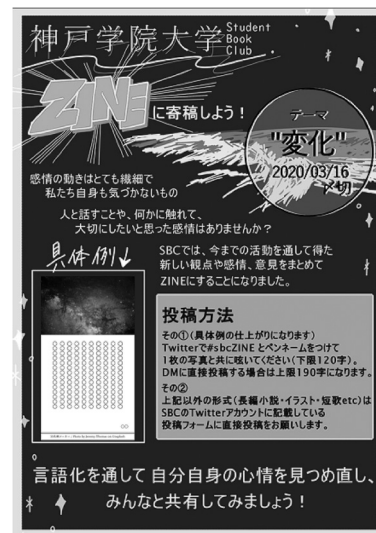


図2. ZINE 投稿募集ポスター

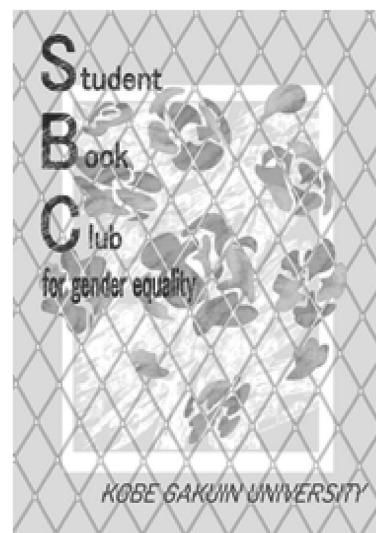


図3. ZINE 表紙

III-2. ZINE への反応

ZINEは50部印刷し、投稿者に配布した残りを交流のあった他大学のコミュニティ、関心を寄せてくれたジェンダー・セクシュアリティの研究者、Twitterで希望した者に配布した。

送付した人々からは、「本や論文、映画などに背中を押されながら、自分の問題関心や感情を正直に言葉にしていることに感銘を受けた」「経験とフェミニズムの先人たちの言葉や理論が会って、それぞれのフェミニズムがまさに立ち上がる過程を見ているよう」「手に質量がある感じ、ジーンって言葉を手に取るってことだったのか!」「抽象的な表現が多く、簡単に消化できるものではなかった。それが刺激になった」といった好意的な感想が寄せられた(ただし、批判的な感想はあえて表明されないだろうことも承知している)。

また、投稿者のひとりには、「匿名であったために、ひと目を気にしないで書くことができた。ジェンダーやフェミニズムに依拠して良いことが分かっていたので、自分の感覚や感情を表すことの価値を疑わずにすみ、日ごろならセーブしそうな主題や文体で書くことができて楽しかった」と述べている。

IV. 参加者の感想

本報告をまとめるにあたって、ブッククラブに比較的恒常的に参加していた3名に、参加した経緯や感想についてヒアリングを行った。各30分ほどブッククラブの活動を振り返りながら話してもらった内容を抜粋して、下記に掲載する（一部報告者によって文脈を補っている）。

・参加した動機

「参加したはじめの動機は、ジェンダーに関心があり、授業外でも話を聞きたい、勉強してみたいというものだった。」(2021年度 本学卒業生)

「自分の感情を言葉にできることが最大のモチベーションとなった。授業で知識を得るだけでなく、ジェンダーに関わる「日常編」が必要だと思っていた。」(2021年度 本学卒業生)

「参加すること自体が、フェミニストであると表明することになると思った」(2021年度 本学卒業生)

「フェミニズムの本をみんなで読むということに意義があると思って（報告者の声かけに応じて）参加した。フェミニズムは思想であり実践でもあるが、実践は実践を通してしか伝えられない・学べないと考えている。これはどうなんだろうあなんだろうと、経験を話したりしながら「みんなで読む」ということ自体がひとつの実践となる。違った人との出会いのなかで伝えたり学んだりすることが、教育機関という守られた場所で行われることも重要だと思った」(大学院生・非常勤講師)

・参加した感想

「あまり図書館行って本を借りて読むという習慣がなかったから、みんなで本を読むという機会それ自体が楽しかった。「ディスカッションがあり、アウトプットの機会があるぞ」という気合いを入れると、思ったことや疑問を意識する読書となった。」(2021年度 本学卒業生)

「学部も大学も違う人と集まったことで、同じ本を読んでも良かったところや疑問点が違うというのが面白かった。学部や大学が違っていると、空気感や文化が違うことにも気づいた。ジェンダーへの関心にまつわる近況を人に話す機会があり、自分の問題意識を打ち明けられたこともよかった。」(2021年度 本学卒業生)

「コロナになってオンラインでの開催となったことに、良い面と悪い面があった。オンラインでなければ、他大学の新しい友人とつながることはできなかった。一方で、ルールを守る必要があって、気軽に参加することが難しくなった。毎回の発言機会がおっくうになった時期もある。必ずしも発言することが期待されない、「ただ居る／体験する」ことができる対面式の機会ももっと持ちたかった」(2021年度 本学卒業生)

「卒論も関連するテーマを選び、大学でジェンダー・フェミニズムを学んだという実感がある。」(2021年度 本学卒業生)

「参加中に自身が教員としての立場へと移行したこともあり、いち参加者として楽しく喋るという意識から、どうやって知識を伝えるか、どうやって話しやすい場所にするかについて考える機会となった。例えば、使う言葉の選び方によってはいいディスカッションにはならない。自分がどのように実践するのか問われた気がしている。」(大学院生・非常勤講師)

V. まとめ

セーフスペースのための実践は、セミクローズな空間を前提としていたために新規に参加を希望する人にとっては障壁ともなったであろうし、前節での感想にもあったように「ただ居る／体験する」という関わり方を難しくする側面があった。さらに、権力の発動や特権性による場の支配可能性からも、完全に自由であることはできない。

しかしながらブッククラブには、参加者の間に基礎知識や問題意識が共有されているがゆえに、自身の感性や自身の言葉を仲間に安心して話す・表現することができる場としての意義がやはりあったのではないかと考えている。なぜなら、学生の日常（例えば家族や友人、アルバイト先の人々、あるいは SNS 等）では、ジェンダー・セクシュアリティ関連の話題に対して、「差別などない」といった否定であるとか、「考え過ぎ／極論である／感情的である」などといったトーンポリシングに出会うことも未だ少なくない。講義の時間のあと、すなわち学生たちが学んだ知識や概念を手にして実践していこうとする場では、ようやく手にした言葉が認められないという現実があるのだ。そしてそれは、戸惑いや心細さ、悔しさや怒りの感情を伴って学生たちに経験されている。

ブッククラブは、いわば〈放課後のフェミニズム〉の実践として、今後も試みを続けていきたい。友人との日頃の違和感の答え合わせ、そして同意や励まし、あるいはともに怒るといった感情の共有は、必ず互いのエンパワメントにつながっている。そしてそのような場があることが、ジェンダー・セクシュアリティにかかわる差別や抑圧、そしてそれらに疑問を呈する言葉を奪おうとする現実立ち向かうことを助ける、力となるかもしれないからである。

引用・参考文献

- [1] Alison, Piepmeier, (2011)、『ガール・ジン——「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』、野中モモ（訳）、東京、太田出版
- [2] 堅田香緒里、(2021)、『生きるためのフェミニズム——パンとバラと反資本主義』、タバックス
- [3] 野中モモ、(2022)「ZINE という選択肢——個人と個人をつなぐ小さなメディア」『立命館言語文化研究』、33 卷 3 号、pp.29-38
- [4] Sue, Derald Wing, (2020)、『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』、マイクロアグレッション研究会（訳）、明石書店

謝辞

ブッククラブに関わってくださった皆さんに感謝いたします。特に、荒田花さん（仮名・非常勤講師）は運営を一緒に支えてくださいました。豊富なフェミニズム理論の知識からはもちろん、セーフスペースのための実践という面においても、彼女のアイデアや心遣いに多くを学ばせていただいています。ありがとうございました。